

『今昔物語集』震旦部研究略史・補遺

宮 田 尚

本誌二六、二七の両号に、震旦部の研究略史を書いた。これに未発表の稿を加えて序説とし、本年六月、論集『今昔物語集震旦部考』を上梓した。

略史と銘打ちをしたものの、震旦部に関する論文は、なるべく広く取りあげたいと考えた。それで上梓に際しては、旧稿を補訂するなど意をはらった——つもりであつたけれど、やはり不備は残つた。取り上げるべき論文のいくつかが、漏れていたので。

論集は、いったん発表した論を集大成したものだ。その不備を紀要論文で補なうのは本末転倒だ。それに、単行本と紀要とでは影響力に違いがあることでもあり、ここで不備を補なつたとて、実効性に疑問は残る。

だが、気付いた不備を放置するわけにはいかない。それは、なるべく広く取りあげようとした趣旨とも反する。擱筆後に発表されたものをふくめ、以下に、補遺を記すしだいである。

田口和夫「『俊頼髓脳』呉招孝説話と源経信」(説話、一九九一)

『今昔物語集』震旦部研究略史・補遺

三三には、『今昔物語集』典拠論のために、との副題が付されている。卷十第8話「震旦呉招孝、見流詩恋其主語」の背景を論じたものだ。藤原師通の日記「後一条師通記」の記事をふまえて立論し、現存しない、未知の和文資料が介在した可能性のあることを指摘している。田口によれば、その和文文化された資料は、源俊頼の父経信が漢故事説話にもとづいて作つたものであり、『今昔物語集』も『俊頼髓脳』も、それに依拠しているということになる。一部に異論はあるものの、『今昔物語集』が『俊頼髓脳』を資料として用いていることは、今日では、ほぼ定説となつてみるとみてよいだろう。田口論は、これを一歩すすめるようとしてくれるわけだ。未知の資料の存在を想定していることにも、興味をおぼえる。

『今昔物語集』の用いた資料が、すべて今日に伝えられているとはかぎらない。というより、その可能性はきわめて低いだろう。したがって出典研究には、未知の資料への視角を用意しておくことが不可欠となる。じじつ、未知の資料の介在を想定せざるをえない局面は、しばしばみとめられる。わたしも何度か、そのような点にふれたことがある。

ただ、これはわたし自身の反省でもあるのだが、未知の資料への論は説得力をもちにくい。現存しない資料が考察の対象であるだけに、ややもすれば死角が残ってしまいがちだ。

田口論にも、解決されなければならぬ問題は、残っている。漢故事説話が宮廷貴族の生活の中に生きていたとの指摘は、首肯できる。この点は、まさに柳瀬喜代志(中国文学と平安朝漢文学、国文学解釈と鑑賞、一九九〇・十)が、同じ『後二条師通記』にもとづいて指摘していることでもある。しかし、経信の編んだ和文の漢故事説話集があったこと、そしてそれが『俊頼髓脳』と『今昔物語集』との共通の典拠となったこと、の二点の想定には、さらなる裏付けが求められよう。呉招孝譚からみちびき出されたこの想定を、そのまま一般化するわけにはいかないのだ。

たとえば、田口論の障害となる事例として、さしあたり想起されるものに、下和譚がある。

経信が漢故事説話を編んだとすれば、呉招孝譚とおなじく、下和譚もそれに収められていた可能性が大だとみなければなるまい。ところが、『難後拾遺抄』に収められている経信の承知していた下和譚と、『俊頼髓脳』および『今昔物語集』所載のそれとのあいだには、下和が帝に献上した品物の形状、帝の怒りを受けて切断された身体の部位などに、あきらかな差異がみとめられる。経信の承知していた下和譚は、どうやら『琴操』系のようだ。

この差異は、『俊頼髓脳』から『今昔物語集』への流れのあったことをさし示しはするけれども、『俊頼髓脳』と『今昔物語集』とが干渉しあうことなく、『難後拾遺抄』型のはなしから派生したと

推定することを妨げるであろう。

このような事例をふくめて、反証をどのように克服していくか、未知の資料への視角が不可欠であるだけに、説明が待たれる。

なお、田中徳定(『俊頼髓脳』の説話引用態度について、駒沢国文、一九八八・二)は、『難後拾遺抄』と『俊頼髓脳』との下和譚の差異について、「俊頼が経信から聞いた話を自分なりに改変」したことによるものだとして説明している。たしかに『俊頼髓脳』所載の下和譚は、各書に引かれている下和譚とは様相を異にした、特異なありようを示している。そこには、いわば俊頼的屈折がみられるのだ。この俊頼的屈折は、文献から文献への流れでは生じにくいもののおもわれる。

二

観智院本『注好選』の発見と公刊とは、『注好選』そのものへの関心と呼ぶとともに、『今昔物語集』の研究をも活気づけた。さらに、金剛寺本の発見と公刊は、『注好選』の広がり、中世においてもたしかなものであったことを証明した。

和田朋子(『注好選』の孝子説話、広島女子大国文、一九九〇・八)は、『注好選』巻上の孝子譚を船橋本『孝子伝』のそれと比較して、類似度の面で二群にわから、類似度の高い話群には、『今昔物語集』のそれとは多少違うけれども、とりわけ強い二話一類の配列意識がみられると指摘。『今昔物語集』への言及は少ないものの、震旦部研究の一翼になう。学部卒業論文。

『注好選』の上巻には、いまいうように『孝子伝』との共通話が

多数ふくまれていることでもあり、震旦部に関していえば、巻九がらみで取りあげられることがおおい。原田信之の二論文(『今昔物語集』震旦部の孝養譚、立命館文学一九九〇・三)、『今昔物語集』震旦部巻九の編集意図、立命館文学一九九一・三)も、『注好選』をテコにして巻九への考察を加えている。

前者では巻題の「孝養」を、追善供養の意をもつと解すべきことを主張。巻九は『冥報記』を主体に、『孝子伝』から導入したはなしを巻頭と巻尾とに配したものであり、『孝子伝』からの導入話の選択は、『注好選』を参考にした可能性があると指摘している。

前者がもつぱら、論拠を『今昔物語集』の外に求めているのに対して、続編ともいべき後者では目を内に向け、孝子譚の本文の決定的状況から、巻九の編集意図に迫ろうと試みる。

原田論を特徴づけるのは、現存資料の中から解答を見出し、いこうとする姿勢だ。具体的には、『孝子伝』と『注好選』とを重視し、巻九の孝子譚は、出典未詳の二話を除いて、『孝子伝』と『注好選』とに依拠しているとする。眼目は、そのうちの五話について、『孝子伝』と『注好選』とを「重ね合わせて本文を作成した」とする点にある。

『今昔物語集』巻九の、『孝子伝』『注好選』に求められる類話をめぐっては、直接関係を確認せず、現存しない未知の資料が介在しているとの見解が、小峯和明(『今昔物語集の形成と構造』笠間書院、一九八五)、宮田尚(『今昔物語集と注好選』再考、日本文学研究、一九八三・十二)らによって表明されている。したがって原田信之の立場は、それと対立する。じじつ、小峯、宮田らの見解は、原田

によって批判されている。

たしかに原田信之のいうように、たとえば九三「震旦丁蘭、造木母至孝養話」の本文は、『孝子伝』(舟橋本)上9と『注好選』(観智院本)上55との表現を兼ね備えていて、両者を「重ね合わせ」たかのようにみえる。

しかし逆にいえば、そのことはかえって不自然でもある。二書の記述をほとんど吸収したうえで一話を構成するなどということが、はたして可能であるかどうか。

二書の類話をつきあわせ、一方の不足を他方で補うことはあるだろう。たとえば『注好選』が欠いている隣人に関する部分を、『孝子伝』で補うことはありうるだろう。だが、ほぼ対等の関係にある両者を摺り合わせしかも、両者の表現を無駄なく吸収して一話を構成するのは、至難の業だ。

いかにも労おおい、こうした「複雑な改変作業」を、にもかかわらずあえて採用するについては、相応の理由がなければなるまい。いったい、それはなになのか。『孝子伝』と『注好選』との両書に類話の求められる一四話のうちで、なぜ五話だけが重ね合わされたのか。その一方に、『孝子伝』のみ、あるいは『注好選』のみに依つたものがあるのはなぜなのか。合成が、かならずしも孝養を強調する効果を生んでいるとは考えにくいだけに、現象面での一致を指摘するだけでなく、そのあたりについての説明がほしいところだ。

なお、『注好選』上55についていえば、そこに伝えられているのは妻に関する部分だけけれども、これは本来、木母を焼いた妻に関する部分と、木母を切りつけた隣人に関する部分とからなりたつ

ていたものとおもわれる。妻の行為が〈焼く〉ではなく、〈破テ〉となつてゐるのは、後半部を割愛するに際して、流血の場面の効果を考慮し、それを生かすためにとられた措置であらう。

この措置が、どの段階でどこされたのか特定できない。『注好選』の原資料が、すでにそのようになつてゐたのかもしれないし、原資料から『注好選』への過程で改変されたのかもしれない。しかし、いずれにしても、『今昔物語集』に通じる未知の資料のあつたことが、ここでも推定される。しかもそれは、表現の上からも、『今昔物語集』に通じる可能性が高いということにならう。

九三における『孝子伝』『注好選』の記述の共存は、合成よりも、このような資料にもとづくところの、分離分割を考えた方が、むしろ無理なく説明できるのではないか。

原田信之にはほかに、『今昔物語集』震旦部の年代分布』『日本文学』の原風景』、三弥井選書、一九九二・一）がある。

三

平林盛得「大東急記念文庫蔵今昔物語集断簡とその僚葉」(『王朝文学』資料と論考)、笠間書院、一九九二・一八)は大東急記念文庫、山田忠雄氏、個人某氏三者のもとにある断簡を、解説を加えるとともに、翻刻紹介したものである。

一連の断簡は、卷三二・24の後半部から卷三三・30の前半部にいたる八葉で、南北朝後期の書写かという。各話の説話番号が、六番づつ繰り上げて書き直されているとの報告が目をつく。

『今昔物語集』が未定稿であることは、疑いが無い。標題からも、

それはいろいろ。卷二七や卷二九の標題に、編集の過程での修正の跡が残されていることは、すでに指摘されておらう。

卷三一にもその痕跡はある。卷三一・12がそれだ。ここにはもともと、卷二九31「鎮西人、渡新羅値虎語」を収めるべく予定されてゐたものと推量される。虎の登場しないはなしであるにもかかわらず〈値虎〉が目録標題にみられるのは、そうした事情を物語るものであらう。

編集過程での試行錯誤の例が、もつとも顕著に、そして集約的にあらわれているのは、震旦部の卷十(鈴鹿本)だ。平林の報告は本朝部に関するものだが、編集過程での試行錯誤は、かならずしも特異ではなく、一定の広がりをもつことを示唆するものとして留意したい。